調査報告

最近在日本出版中国関連書籍報告（2007.8-2008.8）

藤　田　昌　志

关于最近在日本出版的中国书籍

FUJITA Masashi

《提纲》

2007年8月到2008年8月对中国来说是最严重的一年。百年不遇的雪灾，西藏骚乱，四川大地震等事件对中国造成很多不幸。但是，四川大地震时中国民众空前团结。即使用日本人的方式来理解当代中国也不会明白中国人此次空前团结的缘由吧。虚心凝视中国的历史和现状，了解当今中国现状的人才会理解其中原因吧。日本人必须肃清对甲午战争以来中国的轻视。中国和日本已经成为不可分开的经济实体。通过阅读本报告，如有助于了解当代中国，将不胜喜悦。

キーワード：　中国学の方法論，和臭，日清戦争，中国の庶民史，天安門事件

一、序

2007年8月から2008年8月にかけては中国餃子中毒事件、2008年3月のチベット動乱、5月の四川大地震と不幸な事柄が中国を襲った。しかし、四川大地震の時の中国民衆の団結はさすがは中国と思わせるものがあり、8月のオリンピックではとかくの批判はあったものの開会式での壮大な花火や雄大な集団演技は中国を侮る者を震撼させ、中国に一目おく者はむべなるかなとの感を強くした。日本の基準で中国を見ているうちは中国の本当の姿はわからないであろう。虚心に中国の歴史と現実を見つめ、学んだ者のみが中国の真実を知ることが出来る。日本人は日清戦争以来の中国への軽侮の念を払拭しなければならない。そのことなしには両国の未来はないであろう。もちろん様々な問題が中国に存在するのは事実であるがそれを指摘するだけでは済まないであろう。中国と日本はすでに離れられない存在になっているのだから。本報告が中国理解の一助となれば幸いである。

二、加々美光行（2007.8）『鏡の中の日本と中国』日本評論社

大学を卒業した時、中国語学科を卒業したのに中国について何も知らないと思ったことがあ

った。1970 年代後半という時代のせいもあるが、そうした思いを持つ「中国」関係の専門の大学卒業生は多いだろう。日中の相互理解となると更に難しい。加々美氏は日中間の相互信頼、相互理解を妨げる要因について次のように述べている。「より根本的には両国が一九世紀以来歩んできた「近代化」の道のりの違いが常に障害として作用してきた点に求めなければならない。日本の側からみた場合、本来、日本の中国研究が相互理解のために大きな役割を果たすべきであったのだが、現実には戦前からの漢学、支那学、さらに今日の中国研究を含めて、その働きは極めて不十分なものだった。」（はしがき p. 5）。古代中国への尊崇の念と現在の中国、中国人に対する嫌悪の念という相反する気持ちを持つ日本人の中国観の歪みを加々美氏は問題にする。

学問科学、方法論としての原理的問題と日中という両国間の固有の歴史と地理的関係に彩られた問題の二つの角度から中国学の方法論を論じたのが本書である。（pp. 4-5）

全体は**第Ⅰ部　鏡の中の日本と中国**　と　**第Ⅱ部　竹内好再考と方法論のパラダイム転換**に分かれる。

第Ⅰ部では学問科学方法論としての原理的問題が採り上げられている。加々美氏は時代が古代から中世、そして近代へと移るにつれ、研究上の目的論を「世俗世界のために」から「神の国のために」、そして「人間のために」へと移行させ、研究対象の「世界」を研究主体である「人間」に従属するものとして位置づけ、「対話」のない状態が形成されることとなったと述べ（pp. 28-29）、更に「今日、近代西欧科学の一翼を担おうとする現代中国学の主流がウォッチング=観察学に偏したものになっているのも、実はその根底に研究主体の「人間」を研究対象（客体）の「世界」に対し分離しかつ優位に置く近代科学の弊害が働いて、その方法的検証に、「世界」との「対話」の必要性を認めない傾向があるために他ならない。」（pp. 29-30）と現代中国学の問題を鋭く指摘している。

社会科学、人文科学分野での方法上の結論として加々美氏は次の如くまとめている。①科学研究から目的論的価値判断やイデオロギー的判断を完全に排除することはできない。②しかし、「事実認識の客観性」は、目的論的価値判断と因果論的価値判断との混同を克服する努力によって確保することが可能である。③「事実認識の客観性」を確保しえたとしても、その研究成果がいかなる政治的・経済的等の目的に利用されるかに関して、研究者は方法的に社会的責任を負う必要があり、その自覚が求められる。④科学研究から目的論的価値判断やイデオロギー的判断を排除しうるとの「誤った」常識に立って研究を遂行する研究者は、目的論的価値判断と因果論的価値判断の混同を犯す危険性と、そして自身の研究成果がもたらす社会的影響に対する社会的責任の自覚の欠如の危険性がある（pp. 43-44）。

日本の人文・社会科学研究では以上の諸点が方法的に克服されているとは言い難く、同時代中国を研究対象とする現代中国研究の分野では特にそうであると言う。加々美氏は以下、「日本

漢学」と「支那研究」、戦後日本の現代中国研究を通してそのことを検証している。

第Ⅱ部　竹内好再考と方法論のパラダイム転換　は現在日本の「無思想」状況を突破する上で竹内好を再考することに大きな意義があると確信した加々美氏が2006年6月30日から7月1日の2日間をかけて「日本・中国・世界――竹内好再考と方法論のパラダイム転換」をテーマに開催した国際シンポジウムで提起した課題を基に展開した議論である。

「竹内好は魯迅に倣って「抵抗」はあくまで「敗北の自覚」の上に立ってなされねばならないと考えた。」肝心なことは「欧米近代」と「訣別」することでも、又、「勝利の確信」の上に立って「抵抗」することでもない。竹内の本来の方法は「欧米近代」の枠外に飛び出すことではなく、その内側に身を置いて「抵抗」を持続させることに求められた。その方法は「持続的抵抗」を通じて、「欧米近代」の「自己実現、自己拡張」の過程で生じるイノチの忘却、「等身大」世界の切り捨てという文明的な負の渦流を逆方向に巻き返すことによって等身大のイノチを解き放ち、ひいては「自己喪失」から「自己回復」へと進むことに目的がある。「竹内の方法から発する問いは実は竹内自身によっても十分に試されておらず、私たちもまだ、これに答えていないままに置かれている。」(p. 228) という言辞は重く我々の心に迫ってくる。

三、酒見賢一（2007.10）『中国雑話　中国的思想』文藝春秋　文春新書596

本書は著書『墨攻』が2006年にアンディ・ラウ主演で映画化された小説家酒見賢一氏によるものである。酒見氏は「あとがき」で「中国を本当に知りたければ十年なり住むしかないと思うのだが、それでも現在のたった十年のある場所における中国的思考でしかない。（中略）中国人の常識やものの考えの傾向はやはり日本人である者にはよくわからない。古今一級の文人たちのことはその試作や書翰を読めば、それでも日本流にだが、分からぬことはない。しかしそれより下の一般民衆ではどうであろう。そのへんが分かっていないといつまでたってもジャパネスクな中国を書くことになってしまおう。」(p. 228) と述べ、「和臭」のする、「ジャパネスクな中国」=「日本化した中国」を否定的に考えているが、それは筆者とは考えを異にするものである。むしろ日本化した中国にこそ日本人の特徴を探る手だてが存在すると考えるのである。外国理解は自国理解であると思う。異文化理解の基本であると思うがどうであろうか。

もっとも酒見氏のような一種の原理主義的、本源主義的な考えはある意味、正統なものであり、日本人が「仮名」と呼んだ意識の底には中国への劣等感が存在するし、漢文訓読より中国語の原音によって経典を読もうとした荻生徂徠のような人もいる。

「一、劉備」は人物伝を書こうとしたときの文章であるが「そういうものは多くの人が書いているという事で一度でやめてしまった」(p. 229) と言う。酒見氏の劉備評は「無意識的な無責任さと行き当たりばったりがその性格の基調をなして」(p. 18) いるというものでかんばしい

ものではない。

「二、仙人」では「わたし思うに仙人というのは悟りを開いたとか、神示を受けたといった宗教者でなく、長生きしてこの世の楽しみを楽しみ尽くそうと志した言わば快楽主義者の代表ではなかったかと思う」（p. 229）と述べるように仙人を快楽主義者として位置づけている。

「三、関羽」は人物伝としてよりも、関帝という神様となってゆく過程が面白かったので書いたとのことである。関羽は死後、怨霊から最高位の神になっていく。最初は式神、財神であったが、降魔調伏から災難予知の神、悪人退治の神、死者を蘇らせる司命神と万能神のようになっていく（p. 57）。これほどの神格化は世界的にも異常であり学問的研究でもはっきりとした理由がわからない（p. 52-53）。日本人は『三国志演義』の諸葛亮の神格化のことはしばしば言うが、そんなレベルとは比較にもならない関羽の神格化についてはあまり言わない。それは「関羽のことをあまり知らず、たんなる民間信仰の対象と思っているからで、日中友好のためには関羽についてもっと勉強しておくべきである。」（p. 54）と酒見氏は言う。こうしたズレこそ注意すべき点で、その国で何が人気があるのか、その理由は何かといったことを考えるのは外国理解の基本であろう。従来、そうした視点からの研究が重視されてこなかったのは事実であり、アカデミズムの持つセクショナリズムが災いしたとしか言いようがない。又、それだけ中国とは多様な面を持つ相手である。今後はこうしたズレにも注意を払った研究が行われていく必要があると思う。

「四、易的世界」は「聖なるものと俗なるものが同居する陰陽の話」（p. 229）である。易の問題は古代の占術の書なのか、聖賢の道を説く聖典なのかにある（p. 74）。ユングは易の託宣がよく当たる、ないし現実世界や患者の意識によく照応することについていくつかの論文を書き、易占がシンクロニシティー（意味のある偶然の一致）に深く関連していると考えついた（p. 82）。

「五、孫子」では「孫子」は「ルールある戦争に則って、戦争を行わずに優位に立つことを最重要視する書物」（p. 23）とする。

「六、李衛公問対」では「李衛公問対」は「こういうことを書きたいインテリはたくさんいたんだろうなということが分かる書物」（p. 230）であると言う。「李衛公問対」は古典的兵書の一つで、他書と趣が異なり、唐の太宗李世民とその重臣の李靖が兵法について問答するという構成をとっている（p114）。「何事にも徹底的に打ち込み、深淵の理を求める中国人の気質が、戦争にも当然向かったのが兵書に見える成果」であり、『李衛公問対』でピークに達した感がある（p124）。

「七、中国拳法」では一、形意拳と八卦拳、二、太極拳としての中国武術の歴史、について説明している。

「八、王向斎」では中国武術史上、屈指の達人、王向斎について述べている。「「王向斎」に

代表されるように、武術家たちは気功の優秀な伝承者であり、超一流ともなればほとんど仙人の境地に辿り着いており、ある意味では武術家は仙人の末裔なのだろう。」(p. 230) と酒見氏は言う。中国の面白さは明治以来、我々が捨象してきた、「近代」とは異なる領域に足を踏み入れる高揚感に由来するのであろう。

四、一ノ瀬達也（2007.11）『旅順と南京-日中五十年戦争の起源』文藝春秋　文春新書 605

本書は 1894(明治 27)年～95 年に起こった日清戦争を 1937(昭和 12) 年の日中戦争の起源ととらえ、明治日本の兵士が中国大陸で目撃した体験が昭和の戦争にいかに引き継がれ、あるいは引き継がれなかったかを問う（はじめに p. 9）ものである。日清戦争を日本人の中国観・戦争観形成の起点ととらえる。

本書は日清戦争で日本陸軍第二軍に属し、前線の部隊に食料を輸送する仕事をしていた「軍夫」丸木力蔵の絵日記『明治二十八年戦役日記』と丸木と同じ日本陸軍第二軍に属し、遼東半島で清軍と戦った第一師団歩兵第二連隊の上等兵関根房次郎の直筆従軍日記『征清従軍日記』の内容を要約して掲載し、その足跡をたどる形をとっている。

第一章　日清戦争と軍夫・兵士　では、日清戦争の中での軍夫・兵士の日常が描かれている。関根が日記に筆写した日本軍の住民に対する掲示文（漢文）「我軍厳禁撿奪秋毫不侵我兵違者随時凛究是為至要」（我が軍はわずかな物も掠奪しない、そむく者がいれば必ず処罰する）を見ると、上陸当時の日本軍は現地住民に対する一定の配慮を示していた (p. 44) ことがわかる。又、丸木によると航行中の船内で、信号ミスをとがめられた海軍の水兵が憤怒のゆえか、責任を感じてか、自殺を遂げる事件があったという (p. 51)。

「十月二十一日のひる前付族［属］海軍水兵信号旗を振損じ、夫がために大隊長始め医官各士官の前にて司令官よりきびしく責問はれ、言ハかえせずそのまま我が室に立帰り、直ぐさま六発銃にて自殺をなす、交代時間来り室をあけ見て驚き隊長に通じ検視を受、二二日大同江へ着船、水兵の死体は早々陸へ上げ埋葬す、跡にて咄を聞けば隊長の号令に麤相［粗相］も有りという、何は共あれ彼の水兵は気の毒にて有り」(p. 51)。当時の日本人は「名誉」を最も重んじていたのであろう。明治には恥を重んじる気風が濃厚に残っていたということであろう。

第二章　旅順虐殺事件　では 1894 年 11 月 21 日から 25 日にかけて旅順陥落直後の市街地で行われた清軍敗兵掃討によって清軍の死者が 4500 人（清国側記録 2 万人）に達した旅順虐殺事件について述べられている。英米の従軍記者が新聞紙上でこの行為を非難したため、大本営は「市街ノ兵士人民ヲ混一殺戮」した事実を認めざるを得なくなった (p. 75)。丸木日記は市街地以外でも無抵抗の捕虜殺害が行われていたことを記している。「一一月二一日ハ進みて栄城子ニ行、觴に清兵の生捕り有り、敵の様子を尋ねれど実を云わず、彼を柳の木にくくり付け、猶

調(しらべ)たるにかえッて悪口なす、皆これをにくんで近き所より水をくみ来たりあたまよりあびせる、一一月の末寒風はげしく、跡より追々来る兵士この噺(はな)しを聞、我も我もと水を掛る、見る見る間に体は紫色に変じ氷死にしたり」（p. 93）。

旅順虐殺事件と南京虐殺事件（1937 年 12 月 13 日の南京陥落前後）約 2 か月の間に起こった中国軍捕虜、敗残兵、便衣兵（民服に着替えて安全区などに潜んでいた兵士）、一般住民に対する虐殺などの不法行為の類似点に早くから着目している秦郁彦氏の論文に言及しまとめ、中国側の要因として①地形の類似（旅順では海、南京では揚子江を背にしていたので逃げ道がなく、とくに住民の退避が困難だった）②正規兵の便衣化③責任者の逃散を、日本側の要因として①旅順では土城子事件が引き金となったが、南京では上海戦における予想外の苦戦（二ヶ月半で戦死者約一万五〇〇〇人）が兵士の復讐感情を高めた②捕虜を作らぬ方針③サディズム的指揮官の存在④責任者を処罰せずを、更にその他の要因として①外国人目撃者の報道②犠牲者の数をめぐる論争を挙げている。昭和の「虐殺事件」が国内外で「かまびすしい」議論の対象とされているのに、明治のそれが採り上げられないのは清国が国際的に抗議しなかったこと、日本国内にそれを告発する“市民勢力”がなかったことの二点の理由が考えられる（p. 117）。

第三章　北上　では遼東半島を北上する様子が描かれている。

第四章　平和来る　では日本へ帰るまでが描かれている。又、なぜ日清戦争は忘れ去られたのか　という項では、日清戦争の体験が教訓的に記憶されることなく、「南京大虐殺」という同じことが繰り返されてしまった要因として①世代交代の問題②日露戦争というより巨大な戦争を体験したこと、を挙げている。②については「日清戦争の経験は日本人にとってはより苛烈であった日露戦争の前にかすんでしまったのである。日露戦争がなければ、日清戦争という体験がもう少し詳しく、ある陰影を持った像として想起されることもあったかもしれない。」（p. 226）と一ノ瀬氏は述べている。

本書を読むと戦争の異常性がよくわかる。最も恐ろしいのは異常な行為が日常の中で行われることである。戦争はいかなる理由があろうと行ってはならないものであると本書を読んで強く実感した。一読を勧めたい。

五、相原茂（2008.1）『笑う中国人　毒入り中国ジョーク集』文藝春秋　文春新書 616

相原氏を知らぬなら中国語教育の素人であろう。筆者も中国語を教えていた関係で、氏の中国語教科書には注目していた。第一に教師として読む気がするのである。一般の中国語教科書は読む気がしない。第一頁から内容がわかってしまうのである。何ら新しいものはなく、通り一遍の知識が述べられているだけのものが多い。では、相原氏の教科書はどう違うのかと言うと、現在の知識の中で最良のものを提供しようとする誠実さにあふれているのである。同じ知

識を持っていても、提供者の姿勢（言葉のセンス）によって不親切でつまらない提示の仕方もあれば、誠実で心のある提示の仕方もある。相原氏の教科書は後者のそれである。氏は「中国語、発音よければ半ばよし。」という名言も述べられている。大学の一般教養の外国語としての中国語のレベルで言えば、それすらできないのが現状であるから、依然、名言としての価値があると言える。

本書はそうした誠実な相原氏が執筆された書である。したがって、一般の「毒入り中国ジョーク集」のような不謹慎さ自体を面白がるような不誠実な内容の本ではない。そのせいか、不思議なことに読み飛ばしたり読み流したりすることができないのである。氏の持つ誠実さのゆえであろう。

中国ジョークとは少なくとも「中国のことを扱ったジョーク」で、中国の社会や一人っ子政策とか人間関係とか中国の政治や文化状況が反映されているようなジョーク（p. 10）であり、中でもいかにも中国でありそうなこと、そうなるとどうしても社会の腐敗や官僚の不正を題材にしたジョークが多くなってしまうと言う（p. 11）。活字にほとんどなっていない、ウェブ上で閲覧されている「反日ジョーク」も紹介されている（p. 13）。相原氏の中国へのまなざしは優しい。そのまなざしのよってきたるところは氏の中国についての教養に由来するのではないかと思う。氏は「はじめに」の最後の部分で次のように述べている。「中国は大国である。しかも近年の発展ぶりはすさまじい。まさに「古くて、新しい」大国である。/発展にともなう社会のひずみも大きい。それ自身がまるでジョークのるつぼと言えるかもしれない。世界の注目の的として地球のあちこちでお騒がせ事件を起こしている。かつては日本もこんなふうで、世界の困った坊やだったのだろう。/元気印の中国ジョークをお楽しみください。」（p. 14）。

本書は、第１章から第４章までと番外編に分かれている。**第１章　これが中国の「反日」ジョークだ**　では中国「反日」ジョーク、「反台湾ジョーク」、中国政治ジョークを小項目に立てている。中国「反日」ジョークは「日本人としては虫の居所が悪くなるようなものばかり」（p. 21）だがそうしたジョークはいろいろなブログに貼られて紹介されていくようだ（pp. 21－22）。「台湾ジョーク」や中国政治ジョークも皮肉の効いたものが多いが、相原氏はそれを見て中国人を軽蔑するということはない。中国社会には「確かにわれわれが享受しているような言論の自由はないかもしれない。これらを書籍として出版することは現在難しいだろう。しかし、このようなジョークを編み、それを伝播し、共有し、哄笑する中国の人々の精神には、まぎれもなく健全かつ強靭なものがある。／政治や社会の不平等も腐敗も、それを「笑い」という武器で攻撃する。そこにはより良い社会を希求する、強い意思の力が秘められている。」（p. 60）と言う相原氏の中国・中国人へのまなざしは温かい。日本人の日清戦争以来の中国人蔑視はない。

第２章　「職」あれば「権」あり　では中国では自分の従事している「職」を「権」に変え

る（p. 68）としている。「職」が「権」となり「金」となるのである。

第 3 章　社会とは「人と人の間」なり　では「人間関係」重視の中国社会を皮肉るジョークが紹介される。

第 4 章　「戯れ歌」－男の三十は「日立」？　では韻を踏み対になっている歌、「戯れ歌」を紹介している。

番外編　漢字がジョークのもと　では日中同形異義語に関する面白さを紹介している。

本書の中国ジョークを読んで感じるのは、既述のように社会の腐敗や官僚の不正を題材にしたジョークが多いことである。そして「職」を「権」に変え、「権」によって「金」を得るという中国社会の構造がジョークの対象となる。医者だって患者の子供の父親に容赦ない。たとえばこんな具合である。

子供が病気になった。父親が医者に電話をした。
「先生、先生が見えるまでに何をしておいたらよいのでしょうか。」
「そうですね。お金を用意しておいて下さい。」（p. 154）

「中国の病院はまずお金を払う。ホテルなどに宿泊する時もクレジットカードか保証金を要求されるが、病院もそうである。まず一定額のお金を預けることになっている。お金が用意できていないと診察すら受けられない」（p. 155）。中国を嫌う人はこうした面だけを見て中国を批判するが、日本社会だってそれほど立派な社会ではない。ジョークで笑い飛ばす中国人のしたたかさを甘く見てはいけない。

六、楊逸（ヤンイー）（2008. 7）『時が滲（にじ）む朝』文藝春秋

本書は第139回平成二十年度上半期芥川賞を受賞した小説である。（以下のカッコ内の頁数は便宜上（2008）平成20年『文藝春秋』九月特別号の頁数である。）

楊逸氏は1964年中国黒龍江省ハルビン生まれ。1987年来日、お茶の水女子大学で地理学を専攻した。2007年『ワンちゃん』で第百五回文學会新人賞受賞という経歴の持ち主である。『文藝春秋』の受賞者インタビューで楊逸氏は次のように述べている。母方の祖父が地主で台湾に逃げたことから、辛酸をなめ、一家は1970年に下放され、5歳の楊氏も極寒の中で厳しい生活を強いられた。下放後、ハルビンに戻っても住む所がなく高校の教室に住んでいた。伯父のつてで日本に来た。日本に来てから日本語学校に通いながら１日15時間働いた。会社で知りあった日本人との結婚と、離婚、2005年の「反日暴動」後、中国語学習者が激減し、中国語講師だけでは生活できなくなり、日本語で小説を書き始めた（pp. 372－383）。「友人から、あなたみたい

にいろんなことがあったら、もうとっくに自殺してるよって言われますが、私はなんでもないんです。神経が太いというか、無神経だから。／日本の方には温かいところがたくさんあります。中国人には無神経なところがあるから、日本人のこまかい気遣いになかなか気づかなくて、申し訳ないんですけど。／でも、日本人はみな真面目で、なんでも重く受け止めすぎますね。もっと楽観的で無神経にならないと、生きていくのが難しいところもあるんじゃないでしょうか。」（p. 383）と楊氏は言うが、日本人をよくとらえているし、中国人の力強さを体現している自分のこともよくわかっている。それはこの小説の文体、表現にも時に表れており、繊細で微妙、深遠な表現を好む純文学的日本文学のスタイルからは程遠い、野太い、力強い定型の表現として表出されており、選評者である日本人作家の宮本輝氏や山田詠美氏からはその「無神経さ」に苦言が呈されている。このことに関連し、次に「芥川賞選評」について述べてみたい。

「芥川賞選評」の掲載順にこの小説の評価について述べることにする。「不思議な疾走感」と題する石原慎太郎氏の評では次のように言う。「楊逸氏の『時が滲む朝』は中国における自由化合理化希求の学生運動に参加し、天安門で挫折を強いられる学生たちの群像を描いているが、彼らの人生を左右する政治の不条理さ無慈悲さという根源的な主題についての書きこみが乏しく、単なる風俗小説の域を出ていない。文章はこなれて来てはいても、書き手がただ中国人だということだけでは文学的評価には繋がるまい。」（p. 366）と相変わらず中国、中国人への辛口の評であるが、よって立つところは陳腐な「純文学」である。「政治の不条理さ無慈悲さという根源的な主題」を書きこむことより、その中で「どう生きたか」を描こうとするのが中国人作家だと言えるのではないか。抽象的で意味深長な文章が必ずしもすぐれたものとは言えない。石原氏の頭の中は1960年代で止まっているのではないかと言えば言いすぎであろうか。

「二十年」と題する高樹のぶ子氏の評。「「時が滲む朝」は天安門事件の時代に青春を過ごした中国人男性の、その後の二十年を描いた個人史である。」「久しぶりに人生という言葉を文学の中に見出し、高揚した。四十年前、このように必死で社会や国について考え議論し、闘い挫折し変節した青春があった。それを描く文学風土があった。いつから小説の中の若者は、カスミか観念を喰って生きるようになったのだろう。」（pp. 366－367）。「中国の経済はいまや否応なく日本に大波をもたらしているが、経済だけではなく、文学においても、閉ざされた行動範囲の中で内向し鬱屈する小説や、妄想に逃げた作品は、生活実感と問題意識を搭載した中国の重戦車の越境に、どう立ち向かえるのか。今回の受賞が日本文学に突きつけているものは大きい。」（p. 367）。中国の良き理解者であり、小説の中にかつての日本の良き時代を見出している評である。高樹氏には中国がしっくりくるのであろう。

「書きたいことがある」という池澤夏樹氏の評は「授賞は、この人が書くものを我々はもっと読みたいという意思の表明」であり、その意味で、今回の候補作の中で最も授賞に値するの

は楊逸氏の『時が滲む朝』であると言う。ここには「書きたいという意欲」があり、書きたいことは「中国と日本、中国語と日本語の境界を作者が越えたところから生まれたものだ。この二十年ほどの中国の庶民史を日本語で語ることに魅力があって、この人の書くものをもっと読みたいと思わせる。」(p. 367)。「この二十年ほどの中国の庶民史」を書いた小説がたくさん世に出れば日本人の中国理解はもっと進むことであろう。

村上龍氏の「選評」は日本的文学観によって中国的文学観に対して警戒の念を表出している。「おそらくわたしの杞憂に過ぎないのだろうが、『時が滲む朝』の受賞によって、たとえば国家の民主化とか、いろいろな意味で胡散臭い政治的・文化的背景を持つ「大きな物語」のほうがどこにでもいる個人の内面や人間関係を描く「小さな物語」よりも文学的価値があるなどという、すでに何度も暴かれた嘘が、復活して欲しくないと思っている。」(pp. 368－369)。日本的文学観に固執するのも問題ではないかと問いかけたくなる。

「逃げない」という川上弘美氏の評は肯定的である。「「時が滲む朝」。見知らぬ人たちなのに、この小説に出てくる人たちを、どんどん好きになってしまった。それは、あるようでいて、実際にはめったにないことです。受賞をとっても嬉しく思います。」(p. 369)。

黒井千次氏の評「主題と長さ」も肯定的であり、村上龍氏の評と対照的に政治的事件を扱うことにもこだわりはない。「荒削りではあっても、そこには書きたいこと、書かれねばならぬものが充満しているのを感じる。大学受験、天安門事件との関り、日本人残留孤児の長女との結婚、日本への移住、日本における中国人社会での生活などが真正面から描かれている。」(p. 369)。

「言語感覚の差違」で宮本輝氏は「あまりにも陳腐で大時代的な表現」を嫌う。芥川賞もまた文章の力というものが評価の重要な基準と考えているので、唾を飲み込んで「ゴックン」などと書かれると、もうそれだけで拒否的反応を起こしてしまうと言う (p. 370)。天安門事件後の主人公の日本での生活こそが、この小説で深く掘り込まれなければならないのに、「後半になるほど陰影は薄くなり、類型的な風俗小説と化していく。」「どうにも異和感をぬぐえない日本語と併わせて、私は授賞に賛成できなかった。表現言語への感覚というものが、個人的なものなのか民族的なものなのかについて考えさせられるが、楊逸氏が現代の日本人と比して、書くべき多くの素材を内包していることは確かである。」(p. 370)。

宮本氏は「表現言語への感覚」という言葉で中国語表現の具体性、定型化、類型性への志向を敏感に感じとっていることを述べている。繊細な日本文学的感覚からは「無神経な」中国文学のある種の面が我慢ならないのだろう。それは日本文学の狭さでもある。

小川洋子氏の「感想」は「『時が滲む朝』に出てくる浩遠の苦悩は、内側に深まってゆかない。残留孤児二世との結婚、来日、子供の誕生と、外へ外へと拡散する方向にのみ動いてゆく。最初、その点が不満だったが、国家に踏みにじられる状況をただ単に嘆くのではなく、一歩でも

そこから脱出しようとする彼の生気のあらわれだとすれば、納得できると思った。」（p. 371）とし、日本文学的な「内へ」の「深まり」を重視する立場をとるが、「外へ外へ」と向かうことも「脱出」の「生気」とすることによってある種、和解している。

「選評」で山田詠美氏は「前作同様、この作者は応援したくなる人間を描くのが上手い人だ。しかし、女の子の瞳に＜泉にたゆたう大粒の葡萄＞などという大時代的な比喩を使われては困る。このページをめくらずにはいられないリーダブルな価値は、どちらかと言えば、直木賞向きかと思う。」（p. 371）と評し、「大時代的な比喩」、ひいては中国的比喩の一大特徴に嫌悪感を表している。

総じて『時が滲む朝』が芥川賞を受賞したのは、日本文学的な繊細さ、非政治性の尊重、「大時代的」な表現を嫌い、間接的、抽象的、内面的なものを重視する価値観に対して、異質な面があり時に嫌悪感を感じるが、「書きたいこと」「書くべき多くの素材」を持っている楊逸氏に、時代の流れを敏感に察知した評者が一票を投じたためであったと思われる。日本人は機を見るに敏である。内へ内へと向かった力は同時に外へ外へ向かう力をも持つことによってより普遍的で世界に通じるものになるのではないだろうか。

次に『時が滲む朝』の本文について考察してみたいと思う。

表現について。次のような表現は中国語表現の直訳のせいか、また作者の創作によるのか「野暮ったい」奇異な感じがする。「受験生の誰もが（中略）ぐずぐずと出て行く。」（p. 385）、「学校の前にはあてにならない答えあわせをする受験生がいっぱいで」（p. 385）、「ぽかんとしてないで、早く食べようよ」妹の浩心は面倒くさがって、浩遠を促した。」（p. 386）、「浮世知らずの学生は」（p. 387）、「県域の郵便局の前はたむろする学生でいっぱいになっている。」（p. 388）、「志強が大きく跳ね上がって、三人前に立つ配達員の手から、手紙をひったくった。」（p. 388）、「秦漢大学はとんでもなく大きな大学だ。」（p. 389）、「明日朝早く、湖に向かって叫びに来ようか。」（p. 391）、「意外と叫び上手じゃんかよ」（p. 391）「器械」（テープレコーダーのことを指して）（p. 397）、「年配の一人がそぞろ歩きで近付いてきた。」（p. 401）、「黒い眸は泉に落ちた、黒い大粒のぶどうの如くに、しっとりとして滑らかである。」（p. 404）、「これから西北風を飲む暮らしをしなきゃならないんだ」（p. 416）、「さっきまでしゃきっとしていた浩遠は、袁利の写真に撃沈され、一瞬にして水分の抜けた大根のようになってしまった。」（p. 433）等々。

一方、次のような表現には期待にふくらむ素直な心情がよく描写されている。「お前も大学生か、道理で父さんも年だ。勉強って楽しいぞ」父は目を細めて、暗い壁を見つめた。そこに若い頃の父が北京大学の赤い門の傍らで、微笑む写真がかけてある。／秦漢大学の前で、父よりも格好よい写真を撮らなきゃ、その夜、興奮のあまり浩遠はなかなか眠れなかった。」（p. 389）

次の表現には中国人の名を挙げることを重視する意識が表れている。「スローガンとともに頭

上に数知れない腕が上がった。浩遠も力いっぱいに腕を振りあげると、不思議と体の奥から熱く沸き上がるものを覚え、この情景が甘先生の授業で読んだ五・四運動時代の文学作品の中の場面と重なって見えた。自分もいつか教科書に載るような歴史の中にいることに感激しながら、さらに前へ前へと進んだ。」(p. 402)

仲間意識の強さ、人間関係の重視は中国文化の一大特徴である。「狼は鼠になるつもりか？僕らは中国文学科で甘先生の弟子だぞ。身内だよ身内。今こそリーダーシップを発揮して、甘先生の片腕になって、みんなをまとめていかないと」(p. 405)

小説の最後は、「ふるさと」とは何かを子供に質問された主人公が応えるところで終わる。中国人の普遍性と現実の問題が描かれている。

「ふるさとはね、自分の生まれる、そして死ぬところです。
お父さんやお母さんや兄弟たちのいる、暖かい家ですよ」
「じゃ、たっくんのふるさとは日本だね」
浩遠は民生の顔を見つめ、そして「もう帰りましょうか」と
言って微笑んだ。　＜了＞

「たっくん」とは主人公浩遠の二人目の子供「民生」の呼び名である。○○人とは言うまでもなく、○○という国家に属する人であるとともに○○という文化、ここでは家族のいる暖いところである○○を共有する人のことである。しかし、国家と文化にはズレが生じることがある。多文化共生社会という時代性もある。

『時が滲む朝』を中国文化を理解する書として読めば次のようなことが判明する。以下、箇条書きにする。

○中国では「国家のため」という意識が若者の中に存在する。これは日本にはないものである。○詩を声を出して読む伝統がある。作品中では戴望舒（たいぼうじょ）の読を朗読している。○天安門事件の際の学生の運動にも「名」を挙げようとする面があった。○中国人の大学生は専攻ごとに強いきずなで結ばれている。身内意識が強い。○酒を飲んで軽い傷害事件でも起こすと即、退学になる。○「中国人ならではの気取らない暖かさ」(p. 423) を重んじる。

文学作品から国民思想を考察する試みは日本でもあり、津田左右吉のものが有名であるが、楊逸氏のような日中両国を知る人の小説は「日中友好のかけ橋になる」という単なるスローガンより何百倍も両国理解に役立つであろう。今後もこうした文学作品が世に出ることを切望する。

七、その他の書籍

竹内実（2008. 1）『コオロギと革命の中国』PHP研究所　PHP新書502

竹内実氏は著名な中国文学者である。中国の古典に通じ、近代、現代の文学にも明るい。本書ではコオロギと中国の毛沢東主導の革命の類似性－「ぐるぐるまわり」の戦法－に着目しつつ、序　中国における革命　第一話　コオロギの話　第二話　阿Qと小D・「復讐」の詩　第三話　短刀の話　第四話　秋雨秋風人を愁殺す　第五話　家系、軍閥、そして＜見る＞こと　第六話ふたたびコオロギの話・山東省のこと、という章構成をとっている。竹内氏はコオロギの持久戦的な相撲は魯迅の『阿Q正伝』の阿Qと小Dの喧嘩、「復讐」の詩につながる（p. 57）と言う。「復讐」の詩というのは魯迅の散文詩集『野草』に収められている詩のことである。竹内氏は「復讐」の詩にあらわれる「退屈」にコオロギの相撲との類似性を見いだしているようである（p. 84）。秋瑾、魯迅等のことにも言及している、中国近現代史入門といった感じのする書である。博学な著書によるテーマ別のエッセーといった感のある本書をとりとめのない文章ととるか、中国についての教養あふれる文章ととるかは読者の選択によるであろう。『東方』（2008年４月326号）掲載の東方書店本店店頭調べ（売れゆき）ベストテン（２月）（p. 37）では、日本語書籍として、第４位となっている。

興膳宏（2008. 1）『中国名文選』岩波書店　岩波新書（新赤版）1113

序章　中国の文章を読む　で興膳氏は一　中国の文章語　二　訓読と日本語　として日本語との関係で中国の文章語について簡潔ににまとめている。筆者の専門と関係のあるところであるが、共時的と通事的の相違はある。一　中国の文章語では「書きことばによって綴られた文章」である「文言」の特徴として簡潔さと共通語としての性質、時代を超えた文体の一貫性を挙げている。又、本書で取り上げたのは戦国時代の『孟子』『荘子』に始まって、十二世紀北宋末南宋初の李清照に至る、約千五百年にわたる時期の代表的文章である（p. 9）ことが述べられている。二　訓読と日本語　では日本人の作りだした訓読法のリズムが日本語の文章にも内在化して、一つの文体を形成するまでになった（p. 15）ことは驚くべきことで、「他国の言語の音声に通ぜずに、その国の古典が読めるということは、世界的にも希有な現象」（p. 16）であり、「その意味で、漢文訓読法は、その功罪と限界をよく心得て利用するなら、今後も十分に有用な技法といえるだろう」（p. 16）とする。傾聴すべき意見である。日本人の教養は中国古典の訓読によって形成されたのだから。

野村総合研究所／此本臣吾編著（2008. 2）『2015年の中国』東洋経済新報社

本書は編著者が「ポスト改革開放の新たな中国の経済社会戦略を包括的に描くことを心がけ

た」（p. ８）書である。全体は序章と第１～８章に分かれ、それぞれ国家戦略、法、金融、通商・外貨、地域・都市発展、一人っ子世代、日中関係、日本企業の対応について論じている。

第１章　社会主義和諧社会に向けた国家戦略　では和睦、心を合わせて助け合うことを意味する「和」と協調、衝突がないことを意味する「諧」（p. 31）とを合せた「和諧」な社会について2006年10月の第16期六中全会で「社会主義和諧社会建設に関する若干の重要問題に関する中共中央の決定」が採択され、中国共産党第17回党大会（2007年10月に開催）での最重要方針とすることを共産党中央決定として機関決定したことが述べられ（p. 32）、和諧社会建設の12の基本項目について説明がなされている。中国を単なる共産党の独裁国家と決めつけるだけではすまなくなってきていることを肝に銘じたい。他の章も有意義な情報、判断に満ちている。

園田茂人（2008. 5）『不平等国家中国』中央公論社　中公新書1950

中国の不平等を論じるにあたり、生産手段の所有／非所有に注目する階級的アプローチではなく、社会的資源の不均等な分配状況な説明する階層論的アプローチを採用し（p. 12）、中国人研究者が作った図表を切り貼りするのでなく、あくまでも自らの問題意識にそって集められた一次データをもとに、論述を進める（p. 13）のが本書の基本姿勢である。

本書の構成は第一章で社会主義革命後の政策がどのような格差・不平等の構造を作り上げてきたかを概観し、第二章から第五章終章まで具体的な格差・不平等の実態を捉えて記述している。学歴社会の復活による格差、都市・農村の格差、男女格差、経済発展の結果、生まれた都市中間層、現代中国の格差、不平等の総括と今後の中国社会の姿の予想と日本の取るべき対応（pp. 16－17）がテーマとして論じられている。社会学的アプローチによる一次データの収集による論述は価値あるもので画期的だが、記述の煩雑さ、平板さが惜しまれる。

星野博美（2008. 5）『愚か者、中国をゆく』光文社　光文社新書350

本書は餃子好きから中国へ興味を持った著者が1987年５月４日から６月４日までの１か月間、アメリカ人の友人、マイケルと出かけた中国旅行記（p. 328）である。

第一章 香港、第二章 広州、第三章 西安から蘭州へ、第四章 嘉峪関まで、第五章 シルクロード、第六章 ウイグル、第七章 旅の終わり、第八章 それから、の各章に分かれていて、中国で当時、鉄道切符をとるのがいかに困難であったか、またとっても“硬席”がどれほどひどい状況であったか、外国人の特権性などが述べられている。筆者は言う。「中国に関する報道や批評などを目にした時に外部の人間がイメージする中国という国と、人民の実生活には大きな隔たりがある、というのが、二〇年近く、なんとなく、中国と関わり続けてきた私の実感だ。それらを「情報」と呼ぶなら、情報によって喚起されるイメージを鵜呑(うの)みにすると中国はどんど

ん見えなくなるぞ、という一種の警戒感のようなものは、たびたび中国を旅行していたこの時期に培ったと思っている。」（p. 12）。2008年北京オリンピック前後のテレビマスコミの報道はイメージの「鵜呑み」を増大させた。「人民の実生活」との接触を記した本書は中国理解の必読書である。

服部龍二（2008. 6）『広田弘毅』中央公論社　中公新書1951

広田弘毅に対する日本人の印象は、城山三郎氏の小説『落日燃ゆ』によって作られたと言っても過言ではない（p. 273）が、「広田は玄洋社の正式メンバーではない」、国際検察局の尋問に「広田は自分は一切しゃべるまいと思った」などの誤認があり、『落日燃ゆ』の過度に同情的な描写が広田の実像から離れている（p. 274）とする。等身大の広田像を慎重に描き直そうとしたのが本書であるが、広田の評価は、「外政家は、国家が重要な岐路に立つときほど、うつろいやすい世論やポピュリズムと距離を保たねばならない」、「日中提携」に意気込みを示した広田ではあるが、「肝心なところで熱意を失いがちとなった」（p. 276）とするものである。もっとも「絞首台に踏み出す広田を書くとなると、胸のつまるような思いで心は沈みがちとなり、一文も、綴れない日々を重ねた」（p. 276）と言うから、単なる広田弘毅の批判書ではない。実証的な研究として一定の価値がある書である。

八、結び

以上の書籍はいずれも日本で出版され筆者の目に留まったものであり、紹介する価値があるものと考える。現在でも日本人の多くは中国に対して従来の固定観念で判断するところが多く、それは国内矛盾の反映でもあろう。中国と日本の経済格差は約10倍であるが、経済的に豊かな人がそうでない人を軽く見る日本の内実の反映がそこにはあるのではないか。しかし、日本人よりずっと豊かな中国人も出現してきている。日本人にとって中国は不可解な存在であるかもしれない。しかし、近代史を少し勉強してみれば、とりわけ「対華二十一ヶ条要求」などの内容をつぶさに調べてみれば、考えさせられることも多い。日本から中国を見るとともに中国から日本を見る視点も必要であろう。時代は動いている。本報告が日中の未来に光を投げかける一助となれば幸いである。

［引用・参考文献］

（1）加々美光行（2007. 8）『鏡の中の日本と中国』日本評論社
（2）酒見賢一（2007. 10）『中国雑話　中国的思想』文藝春秋文春新書596
（3）一ノ瀬俊也（2007. 11）『旅順と南京－日中五十年戦争の起源』文藝春秋　文春新書605

（4）相原茂（2008．1）『笑う中国人　毒入り中国ジョーク集』文藝春秋　文春新書616
（5）楊逸（ヤンイー）（2008．7）『時が滲（にじ）む朝』文藝春秋
（6）竹内実（2008．1）『コオロギと革命の中国』PHP研究所　PHP新書502
（7）興膳宏（2008．1）『中国名詩選』岩波書店　岩波新書（新、赤版）1113
（8）野村総合研究所／此本臣吾（このもとしんご）（2008．2）『2015年の中国』東洋経済新聞社
（9）園田茂人（2008．5）『不平等国家中国』中央公論社中公新書1950
(10) 星野博美（2008．5）『愚か者　中国をゆく』光文社　光文社新書350
(11) 服部龍二（2008．6）『広田弘毅』中央公論社　中公新書1951